北を語る

秋 2010.10 No.34

北を語る会

代表 渡會純价
事務局 札幌市東区北33条東6丁目2-28
㈱サン設計事務所内
TEL (011) 753-1622
FAX (011) 742-1888
印刷所 株式会社フロンティア企画印刷

創立20周年記念号

20年を経てこれから

幹事長 吉岡潤三

平成2年7月17日、第1回の例会は24名が集い京王プラザホテル札幌で開かれた。

「北を語る会」20周年を記念した第80回の例会は、記念旅行を兼ねて平成22年7月17日ラベンダーが咲き誇る富良野で行われた。

2日目の7月18日朝、「ハイランドふらの」の"ラベンダーの海"で

1990年の春頃、書家小川東洲さんから当時の知事横路孝弘さんを囲んで北海道について自由に語ろうという呼びかけに応じて、会合に気楽に参加する積りであったが、案内を始めとし、全ての裏方を荷負うこととなり、それ以来今日まで80回の例会を1回も休んだことはなかった。その中には9年前に劇症肝炎を患い、入院中に小康状態を見計らって外泊許可をもらい出席をしたこともあったりしながら今日迄続いている。

初代会長の書家小川東洲さんは、書の世界での重鎮で自他共に厳しく強烈な個性をお持ちで、交友知己も多岐にわたっている方でした。2代目会長の渡会純价さんは北海道版画界のリーダーで、優しく、明るいリズム感に溢れた豊かな個性をお持ちで、いずれも秀れた個性の魅力で100名を超える会員が集まった大きな要因でもあると思う。

倶楽部的なこのような会が20年にもわたってすこぶる健全に歩んでこれたのは、会の名前、目的、理念、会則等を早々に決め、方向性を定めたこと。会報を発足後1年半頃から発行し、会員相互の共有の場を配慮したこと。講演の他に演奏会、観賞会等も行い、共通に音や芸術等の感動を持つようにしたこと。更には、幹事の皆さんが

2010年夏 ― 日常雑感

横　路　由美子

７月某日

東京の品川にあるタイ王国大使館に夫婦で夕食のご招待を受けた。

大使館は、もともと和歌山県の豪商、濱田一族から1931年　福沢諭吉の養子　福澤桃介氏が2,500坪を購入、1934年に和田順顕氏の設計、清水建設の施工で建てられた美しいゴシック様式の建物である。玄関正面の前田寛

治画伯の絵画、ルイ王朝風のシャンデリアなど見とれてしまう程だ。

タイ王国大使ご夫妻と、公使、産業省の役人、全部で６人のテーブル。タイシルクを使った素敵なセッテイング、タイ風やきそば、辛いトムヤンクンスープ、チキンと野菜のカレー、さつま揚げによく似た天ぷら、デザートは長方形に切ったマンゴーを、ココナツミルクで味をつけたもち米の上に載せ、さながら握り寿司のよう。美味しい味とともに、16世紀・17世紀から重ねてきた日本とタイの交流、北海道知事時代、シリントン王女をお迎えした時の事など楽しい会話が弾んだ。(政情については時が時だけに話題を遠慮した。) デパートなどには、沖縄や宮崎産のマンゴーがびっくりするような値段で出ているが、タイ産は一個350円程度、皮が薄くて傷みやすいのが輸入の際の欠点というが、甘さといい、ジュウシーさといい抜群に美味しい。

その数日前フィリピンの大使夫人にお会いした。夫の衆議院議長と言う仕事柄、私もいろいろな方にお会いする機会がある。その時も大使夫人に言われたのだが、「看護師や介護福祉士の試験、特に日本人でも読めないような特殊な漢字のはいった試験をして合格率２パーセントというのは、ＥＰＡ（経済連携協定）の意味が無いのではないか。フィリピンから来る人たちは４年制大学を出た人たちなのですよ。安い労働力と考えて使い、試験で落として帰国させると言うように見えてきます。」高齢社会のなかで本当に外国人労働力が必要なら試験では言葉の壁を低くできないものだろうか。インドネシアから来た介護士の人たちにお会いした事があるが、みんな一生懸命日本語を勉強しながら働いて施設入居者の皆さんの評判もなかなかよかった。日本で働いたり留学したりしている若者達を、日本にいい思いを持たないまま帰国させていいはずはない。

７月某日

飛行機で札幌に帰る途中、多田富雄さんの遺作「残夢整理―昭和の青春」を読む。多田富雄さんは世界的に有名な免疫学者でこの10年は、脳梗塞と前立腺ガンと闘い不自由な体ながら、論文、エッセイ、新作能を発表、同時に自民党政府のリハビリー90日で打ち切りに猛然と鶴見和子さんと「弱者切り捨てを許さない」と立ち向かった方である。残夢のように、事ある毎に記憶によみがえる死者達を丁寧に思い出し、同じ時代を共に生きた証が書かれている。「思い出す事の何と言う切実さよ」との呼びかけが、私の中の亡くなった両親や友達の事と呼応し響きあって涙した。

８月某日

「体操が苦手」と自分の中に刷り込まれたのは、小学校２年の時、通信簿で「中の下」を貰って以来だ。夫は、

スポーツ少年だったそうだが、中学２年の時交通事故で入院１年半の大怪我をして、いろいろ不自由さを負っている。３月に56年前のその事故と同じ足の骨を結んでいた金属が金属疲労でバラバラになって骨折、カートでのゴルフもしばらくお預けになった。したがって、お互い忙しくもある私たちの共通の趣味と言えば、読書か日曜日「朝いち」の映画で、たまたま東京にいる時はできるだけ一緒にいく事にしている。インドや中国、韓国、イランなど、どちらかというとマイナーな作品を岩波ホールや渋谷の文化村でみたり、面白いと映画評に出たのを見逃さないようにしている。最近では、アメリカ・メキシコ共同制作の「闇の列車、光の旅」。中南米ホンジュラスからメキシコ、アメリカへ暴力や貧困と苦闘しながら国境を越える家族、若者。「北」への道は、大きな「闇」の中だが、微かな「光」を人々の絆の中に見る事ができる。

スペイン・アルゼンチン共同制作の「瞳の奥の秘密」。1970年代のアルゼンチンの暗い軍事政権をバックに、深く人間の深層をえぐるような作品で、辛く重たいがいい映画であった。

ここ数年、昔は西部劇の俳優くらいにしか思わなかったクリント・イーストウッドが、監督として次々話題作を生んでいる。「硫黄島からの手紙」「父親達の星条旗」昨年、おととしと「グラントリノ」「チエンジリング」「インビクタス」と名作である。「チエンジリング」（神隠し、取り替えられた子ども）世界恐慌の前夜、1928年ロスアンゼルスで実際にあったはなしである。話はとても恐くつらいのだが、主役のアンジェリーナ・コリンを中心に醸し出される「古きよき時代」は映画の醍醐味である。これは、夫はSPの人と一緒に去年見たと言っていたが、わたしは機会を逃し夫が買ってくれたDVDでようやく見る事ができた。夫に追いついた気持ちである。

８月某日

恒例の横路政経セミナーで元朝日新聞記者、桜美林大学教授の早野透さんの話を聞く。偶然、民主党代表選挙をまじかに控えての講演になった。「小沢さんが代表選に出るべきか、出てはいけないとかいろんな意見が在るでしょう。でも小沢さんの立場に立てば、絶体絶命、出ると言う結論になるでしょうね」といわれて「小沢さんの立場に立てば」そんな考え方が在るのかと正直思った。「理想の社会はどこかにきちんとできあがっているものではなくて、結局、われわれは、夢や理想を追いかけ、失望しては又たちあがる。いわば永続革命、永久革命なのですね」と言う結論が、心に素直におちて、「希望を失わないで頑張ろう」と友人達と言い合った帰り道だった。

９月某日

土曜日の10時にもかかわらず、かでるに高校生が130人、先生方も20人以上来てくれた。札幌ユネスコの「世界 寺子屋運動」の 街頭募金行動のためにまず１時間半勉強して、三越前や駅前に立った。私たちユネスコ会員もサポートに立ったのだが、１時間半で合計約25万円集まった。すべてボランテアである。若者の力と協力して下さった市民の方々、とても有り難く勇気と幸せを感じながら帰途に就いた。

９月某日

94歳の母は、亡き父横路節雄が16年間小学校の教師をしていたので、遺族年金を貰っている。そのため２年に一度北海道教育庁から、戸籍謄本を送れと言ってくる。忙しい間を縫って区役所にとりにいったのだが、「長男の妻」では直属の親族でないので本人の委任状が無いと受け付けられないと言う。私は健康保険証も出し、自分を証明し「母は右手が利かず、委任状を認識できない介護度認定最重度５です」と言ったが「窓口では、お母さんが障害を持っているかどうか分かりません。高齢者不明の問題などもあって厳しくなって形式が大事なのです。」と言われて「目の前では書かないで下さいね」と「委任状用紙」を渡された。窓口の「好意」かもしれないが、形式だけの字の書けない母の幻の委任状のようなことがいろいろな問題の根元に在るのではないか。私には到底受け入れ難く、結局 、夫にも頼めず 夫の弟に忙しい中、区役所にいってもらって、１カ月遅れで無事、義務を果たした。「長男の妻」は一番の介護者でありながら、法律的には弱い者であると自覚させられた。

（カットも筆者）